

## 2022年度イラン短期研修報告書

横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 博士前期課程  
西部 唯衣

本報告書では、筆者の研究課題に近づけるかたちで、女性やジェンダー関連の議論やそれから得た知見に焦点を当てることとする。なお、本報告書の内容は筆者の見解である。

### 1. テヘランの街で見かけた女性の姿

2022年9月16日以降、イランの首都テヘランで起きた事件を発端として、女性を中心とした抗議活動が行われてきた。報道では、その抗議活動の一部として、頭髪を覆うヘジャールを着用しない女性の存在が目立つと伝えられている。本研修中に抗議活動を目にすることはなかったが、ヘジャールを着用していない女性は少数ではあるものの一定数見かけた。そのような女性は首までヘジャールをおろし、スカーフのように巻いていたことも確認できた。ヘジャールを着用しない自由を表明する一方で、抗議活動発生直後には「指導巡視隊」がヘジャールを着用していない女性の取り締まりを強化した時期もあったため<sup>1</sup>、「指導巡視隊」に取り締まれる直前に首に巻いていたヘジャールを頭に着用できるようにするということが、筆者には女性たちの葛藤であるように感じたが、それが新しい様式にもなりつつあるようであった。

### 2. イラン国際関係学院（SIR）での発表と議論

SIRでのグループ別発表では「戦後日本における論争」をテーマに設定し、とりわけ筆者は「選択的夫婦別姓の議論」をもとに日本における家族観や結婚観の変化について発表した。発表後、参加していたSIRの女子学生1人に「イランでは婚姻時に夫婦の名字を同一にする必要はないが、仮にそうではないとして、結婚後に名字を変更し同一にすることは家族にとって重要だと思うか」と質問してみた。彼女は、幼少時代に家族の中で母親だけ名字が違うことに疑問を抱いたことがあり寂しく思ったこともあるが、彼女自身が結婚した際に夫の名字に変更しなくてよかったと感じており、家族の中で名字が違ってもそれは家族の絆に影響するものではないということ、実体験を交えて語ってくれた。その考え方の変化について詳細な質問をすることはできなかったが、今回の発表を通して、イランの家族観やそれに関連する民法の規則や慣習の一旦をも学ぶことができた。

### 3. エスファハーンにおける女性

筆者が見た限りではあるが、エスファハーンの街中でヘジャールを着用していない女性はほぼいなかったことは、テヘランの街で観察したこととの相違点であった。また、ヴァルザネ市という村を訪れた際、そこでは女性が織物を生産していることを知った。とりわけ机の上に敷く敷物やタオル織りなど、実際に女性が伝統的な仕事に従事している様子を見ることができた。テヘランではレストランやモールでの販売員として働く女性が多いと感じ

---

<sup>1</sup> 青木健太「No109 イラン：長期化する抗議デモ」『中東かわら版』2022年10月28日、  
[https://www.meij.or.jp/kawara/2022\\_109.html](https://www.meij.or.jp/kawara/2022_109.html)（2023年3月23日最終閲覧）

ており、ヴァルザネで見たような伝統的な仕事をしている女性を近くで見ることは難しかった。さらに、女性が伝統的な白いチャドルを着用することがヴァルザネの一つの特徴であると伺った。実際にそれを着用している女性がいたことから、ヴァルザネでは伝統や慣習が大切にされていることがわかった。地元メディアにインタビューされた際に白いチャドルをプレゼントしてもらったことで、再度ヴァルザネを訪れたいという気持ちがより一層強くなった。

#### 4. 修士論文執筆に向けて

本研修中にジェンダー関連の議論になった際に、イラン人が「イランでは女性の大学進学率が男性のそれよりも上回っている」ということを誇らしげに主張していたことが印象に残っている。筆者には、西欧社会からのジェンダー・ギャップに関する評価も意識しつつ、「女性の大学進学率の上昇がイランにおけるジェンダー・ギャップの縮小に寄与しているのだ」と対外的にアピールしたいのだと感じたと同時に、イラン側の女性の高学歴化に対する評価を知る重要な機会となった。

また、政府機関や政府間組織に訪問し、各機関において地域的統合の可能性や重要性、国内の経済政策などについて伺った。その中でもっとも関心を抱いたのは外務省訪問時に Alavi Sabzevari 氏のお話の中で紹介された the Indian Ocean Rim Association (IORA) が女性を経済的にエンパワーするための取り組みを行っていることであった。とりわけ漁業など海に関わる仕事に従事する女性の能力強化がその中に含まれていることを知り、今後、IORA による女性のエンパワーメントの取り組みがどのように発展してきたのか、また女性たちにどのように寄与しているのかを調べたい。

さらに、中央銀行での女性の雇用に関する議論の中で「女性は家で働くことを好む」ということを伺った際、女性の大学進学率が上昇しているにもかかわらず、卒業後は家庭に専念するという構造に疑問を抱いた。そこで、女性が大学に行く動機や理由について質問したところ、女性が大学に進学するのは「文化的な理由」からであると答えてくださった。修士課程でイラン女性の「社会進出」について研究している筆者は、この「文化的」の意味や高学歴女性が家で働く背景に着目しながら修士論文を完成させたいと感じた。

#### 5. 本研修での心残り今後の課題

政府機関やシンクタンクでの議論を通して、イランにおける女性関連の前向きな取り組みやその達成を知ることはできたが、イランが抱える現状の課題については深く議論ができなかった。例えばヘジャーブを着用していない女性は街で見受けられたものの、その状況についてイラン側からの言及はなかった。ヘジャーブ着用義務に抵抗する社会状況に対して政府としてどう対応すべきなのか（すべきでないのか）、国連女性の地位委員会からの除外についてはどう感じるのかなど踏み込んだ質問ができなかった。

また、シンクタンクでの議論の中で、“empowering women”というのは西欧社会の考え方であるとの意見があったが、政府機関での女性に関する取り組みの紹介の中や議論ではむしろ empower という言葉を使用する場面もあった。ここではイラン国内にある矛盾のように筆者は感じたが、ここでも深掘りする質問ができなかったことが心残りである。

上記のような心残りはあるものの、これらは今後筆者が行う現地調査で明らかにしていく課題としたい。